



遷宮で結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

出雲大社平成の大遷宮	2
伊勢神宮式年遷宮「遷御の儀」	4
臨時出仕に奉仕して	5
平成二十五年教化研修会報告	6
初任神職研修	8
平成二十五年総代研修会	8
平成二十五年埼玉県神社庁神職総会	9
雅楽普及研修会	9
訃報 井上久前埼玉県神社氏子総代会会長逝去	9
神道入門講座およびバスツアー開催	10
庁務日誌抄	11
新年互礼会開催のお知らせ	11
神社実務研修会開催のお知らせ	11
式年遷宮の諸祭(平成二十五年)遷御まで	12

目次



第206号
 発行 埼玉県神社庁
 さいたま市大宮区高鼻町1-407
 電話048(643)3542
 編集 庁報室
 印刷 株式会社アサヒコミュニケーションズ



内宮 遷御の儀 10月2日

提供 神社新報社

出雲大社平成の大遷宮

森田 喜久男

平成二十年四月から始まり、平成二十八年まで続く出雲大社の「平成の大遷宮」は今年クライマックスを迎えた。遷宮とは、神社本殿の造営や修造に伴い、神の宮を遷すことである。

出雲大社では、六十年ぶりに本殿や諸社殿の修造がなされたが、それに伴い、祭神である大国主神（出雲大社では、大国主大神と表記するが、ここでは『古事記』の表記に従う）を仮殿（もとの拝殿）に遷す「仮殿遷座祭」が斎行された。平成二十年四月二十日のことである。その後、五年にわたる本殿や諸社殿の修造を経て、今年、平成二十五年五月十日、大国主神は修造の成った本殿に還御し、それに伴い「本殿遷座祭」が執り行われたのである。

この「本殿遷座祭」に、私は幸運にも参列することができた。当日は、朝から雨が降り続いてしたが、午後七時、出雲大社の境内に着くと雨はすっかりやんでいた。末席に座っていると、静寂の中に、時折、神職の鳴らす太鼓、笛の音、警蹕の音が聞こえる。「ご神体」は、絹垣に囲まれて提灯の明かりのもと本殿に還御されたが、それを遠望することはできなかった。

しかし、千家尊祐宮司が、「幸魂、奇魂、

守り給ひ幸へ給へ」と三度唱えられる神語に合せて、参列者たちへ回を重ねる毎に唱和する声が広がり、それが一体となって、大地が鳴動するような大きなうねりとなった。『古事記』の神話によると、大国主神が、須世理毘売を連れて、須佐之男命のもとから大刀、弓矢、琴を奪って、根の国を脱出する時、琴が木に触れて大地が鳴動したと書かれている。まさに、それを想起させるような参列者の唱和であった。

そして千家宮司が本殿の扉をお閉めになった瞬間、ざあーと雨が降ってきた。この超自然的な現象に神の存在を認識した人々も多かったことであろう。私自身は、出雲に関わる神話を研究対象としているが、この日、参列した人びとが体験した「奇跡」が、後の世の人びとに「神話」として語り継がれるのではないかと考えた次第である。

このような歴史的瞬間に立ち会うことができたのは、研究者としても幸せなことであった。前回の遷宮は、昭和二十八年であり、その前は明治十四年（一八八一）である。伊勢神宮のように二十一年に一度実施されるわけではないので、一番問題となるのが、技術の伝承であろう。

今回の遷宮では、前回の「昭和の御遷宮」

の詳細を知っている方はほとんどおられないので、過去の記録だけが頼りである。今回の遷宮に際しては、明治や昭和の遷宮に関する写真や絵図が残されていたので、宮大工の方々は、その綿密な検討を行った。まさに実学的研究である。その結果、明治の修造時に行われた伝統的な塗装が復活した。本殿の銅板に施された「ちゃん塗り」である。「ちゃん塗り」とはエゴマ油を主成分とし、これに松ヤニ、鉛、石灰を混ぜた塗料であり、銅板を保護するために大きな威力を発揮する。千木や勝男木には油煙（炭）を混ぜた「黒ちゃん」、破風の飾金具には緑青を混ぜた「緑ちゃん」が塗られた。

直接お会いできない先人から教えを受けるためには、先人の残した仕事を自分自身の眼で観察しそこから学ぶしかない。しかし、そいうやることで技術は確実に伝承されていくのではないか。手取り足取りで教えてもらうのではなく、自分自身で主体的に取り組み、先人の残した仕事そのものと対話を繰り返すことで、先人の声が聞こえてくる。まさに、学問の世界にも相通することであろう。

さて、出雲大社の遷宮の歴史をひもとくと、文献史料上の初見は『日本書紀』で齊明天皇五年（六五九）に、出雲国造に命じて厳神（ウツノカミ）の宮を修造させたことが書かれている。ただし、これについては熊野大社のことであるという説もある。その後、平安時代には少なくとも十度は遷宮が行われている。その頃の出雲大

社については、源為憲の幼学書『口遊』^{くちすま}によれば、東大寺大仏殿や平安京大内裏の大極殿を抜いて、日本で一番高い建物であったと伝えられている。

この伝承については疑問視する研究者もいるが、古代の人びとが出雲大社の本殿を高層神殿と認識していたことは事実である。出雲大社の創建については、『古事記』や『日本書紀』の国譲り神話の中で語られる。すなわち大國主神が天つ神の御子に国を譲る代わりに天つ神の御子の住む宮のように立派な建物を建てて欲しいと願って建ててもらったのが、出雲大社ということになっている。

国譲り神話を可視的に表現するためにも、古代の出雲大社は高い建物でなくてはならな



ちゃん塗りの塗料が施された平成の出雲大社本殿

かった。故に、古代国家も中世国家も出雲大社の造営には力を入れたのである。いにしえの出雲大社の本殿の平面図とされている千家国造家所蔵の「金輪御造営差図」^{かなわのござうえいさしず}には、巨木三本を一組とする直径一丈の柱が九つ書かれ、それが赤い線と田の字に結ばれており、そこには「引橋長一町」と書かれている。

この絵図に書かれていることが事実なら、かつて一〇九メートルの階段が存在したことになる。また、この絵図には「国御沙汰」と書かれていた。このことは、出雲大社の造営が朝廷の命令を受けて国衛が経費を調達することによって行われたことを示している。具体的には莊園・公領を問わず一律に臨時税を徴収するという「一國平均役」というやり方で経費を調達した。

『左経記』、『小右記』など平安時代の貴族の日記によると、出雲大社はしばしば顛倒したが、国家はその威信を賭けて本殿の造営を続ける。しかし、鎌倉時代の宝治二年（二二四八）の造営の後、本殿はしばらく仮殿の状態が続いた。その間、神仏習合の影響が出雲大社にも及び、大社の境内には三重の塔や鐘楼が建ち並び、鰐淵寺から僧が来てお経をあげていた時期もあった。

その後、徳川幕府が政権を握った江戸時代の寛文七年（一六六七）に出雲大社は久しぶりに仮殿ではなく、正殿としての本殿を造営するに至る。この時に神仏の分離がなされ、今日の出雲大社に近い景観ができた。

今日の出雲大社の本殿それ自体は、延享元年（二七四四）の造営であるが、その基本的なデザインは寛文年間の造営を踏襲している。

実は、この寛文年間の造営は、出雲大社の歴史を知る上で貴重な情報を今日の私たちに残してくれている。それはこの造営に際し、境外摂社の命石社（現在の命主神社）から石を切り出したところ、弥生時代の銅戈と勾玉が発見されたのである。このうち、銅戈は九州産、勾玉の材質のヒスイは北陸産である。

この事実は私たちに何を教えてくれるのか。出雲大社はいつ創建されたかと問われれば、神職の皆さんは「神代の昔から…」とお答えになるだろう。日々神事に奉仕されている皆さんに対して私は異を唱えるつもりは毛頭ない。ただ、研究者として言える事はこうである。出雲大社が建てられているこの杵築の地は、二千年以上も前の時期から、すでに聖地であり、同時に古代には「北ツ海」と称された日本海沿岸における交流の舞台であったのだ。そのような聖なる空間であると同時に開かれた空間に、出雲大社は造営されたのである。

出雲は決して閉鎖的な空間ではないし、敗北して逼塞を強いられた場所ではない。古代出雲の果たした役割を列島の古代史の中に明確に位置づけること。これが私自身の研究テーマである。「平成の大遷宮」は、そのことを私に再認識させてくれた。

（島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員）

伊勢神宮式年遷宮「遷御の儀」

第六十二回神宮式年遷宮の最重要儀である遷御の儀が、十月二日は内宮、十月五日は外宮において厳粛に斎行されました。

天皇陛下には、両宮の出御の時刻である午後八時に、皇居内の神嘉殿南庭に出御遊ばされ、「遙拝の儀」を執り行われました。

内宮では、手塚英臣掌典長を勅使に迎え、黒田清子臨時祭主、鷹司尚武大宮司、高城治延少宮司以下百数十人の神職が奉仕しました。

皇室からは、秋篠宮文仁親王殿下、政府からは安倍晋三首相ら閣僚を始め、全国の神社関係者等約三千三百名が奉拝しました。

外宮では、手塚英臣掌典長を勅使に迎え、黒田清子臨時祭主、鷹司尚武大宮司、高城治延少宮司以下百数十人の神職が奉仕し、皇室



内宮 遷御の儀 提供 神社新報社

からは秋篠宮文仁親王殿下を始め、全国の神社関係者等約三千六百名が奉拝しました。

本県からは、中山高嶺庁長が外宮の供奉員、東角井真臣水川神社権宮司が外宮臨時出仕として奉仕にあたったほか、竹本佳徳・押田豊両副庁長以下、内宮、外宮合わせて約七十名が特別奉拝者として参列しました。(次第は下段参照。関連諸祭については十二頁を参照)

遷御の儀終了後、特別奉拝者一同で二礼二拍手一札の作法で拝礼し、退出となりました。

また、両宮遷御翌日の奉幣の儀では、池田厚子神宮祭主以下の奉仕により、天皇陛下からの幣帛が新宮に奉られました。

さらに、新宮で初めての神嘗祭が、外宮十五日、内宮十六日に斎行されました。両宮では、午後十時より由貴夕大御饌、翌日の午前二時より由貴朝大御饌が行われ、池田厚子祭主・大宮司以下神職約三十名が奉仕しました。同日正午からは、勅使を迎えて奉幣があり、奉幣の直前には、天皇陛下が寄せられた稲束「懸税」を始めとする全国から届けられた初穂が御正宮の板垣に懸けられました。

また、遷宮奉祝奉納行事として全国各地の芸能や祭りが十月八日から十一月三十日まで奉納されます。本県からは、秩父祭屋台囃子保存会による「秩父屋台囃子」が、十月十九日に、内宮神苑特設舞台で奉納されました。

なお、別宮十四社については、内宮第一別宮の荒祭宮は十月十日、外宮第一別宮の多賀宮は十三日、以下、平成二十七年三月までに、順次、遷御が行われます。

遷御の儀 次第 概略

皇大神宮 平成二十五年十月二日 午後八時
豊受大神宮 平成二十五年十月五日 午後八時
※(一)内は豊受大神宮

一、参進

午後六時の第三鼓を合図に、奉仕の諸員が内宮斎館(外宮斎館)前庭より参進致します。

二、対揖

参進の列は、先ず勅使の御列、次に神宮祭主・大宮司・少宮司以下百数十人に及ぶ奉仕員の列が続き、松明の明かりに照らされて参道を進みます。

三、太玉申行事

第二鳥居に於いて勅使の御列と祭主・大宮司・少宮司以下の列とが参道の両側に相対して対揖、勅使の修祓の儀が行われます。

四、勅使御祭文奏上

玉申行事に向かい、御垣内参入に先立って勅使、勅使随員、祭主、大宮司、少宮司、禰宜がそれぞれ両手に太玉申を執って正宮御垣内に向かいます。そして諸員が中重の石壺に著版、まず太玉申を納める行事が行われます。

五、御正殿開扉

勅使及び祭主・大宮司・少宮司以下諸員が中重の版を起ち内院に参入し、勅使が御祭文を奏せられます。

六、鶏鳴 出御

大宮司、少宮司によつて御正殿の御扉が開かれ、祭主以下が殿内に候し、正殿、新殿の殿内を整え、正殿前では奉仕の順番に名前を告げられ、次第によつて渡御の列次が整えられます。

七、入御 閉扉

所役の宮掌が瑞垣御門にて鶏鳴三声(皇大神宮はカケコー、カケコー、カケコー)豊受大神宮はカケロー、カケロー、カケロー)を奉仕し正八時、勅使神前に進み謹しみて出御を奏請せられます。

八、勅使御祭文奏上

ここに神儀は静々と御正殿を出御あせられ、絹垣の内に入らせられて御道敷の白布の上を新殿へとお渡りになります。

九、諸員退出

御列が進ませられるにたがって庭燎はすべて打ち消され、淨園の中、楽長、楽師による道楽の調べの中、前陣後陣と威儀を正し厳かに新宮へと向かいます。

十、荒祭宮(多賀宮) 遙拝 退出

神儀静々と新殿に入御あせられます。そして、前陣後陣の御装束神宝が次第に殿内に奉納せられ、全てが整い大宮司、少宮司が御扉を閉じ奉ります。

十一、勅使御祭文奏上

勅使が御祭文を奏せられます。

十二、諸員退出

諸員中重に退き、奉拝八度拍手両端(八度拝)の拝礼を行つて御垣内を退出致します。

十三、荒祭宮(多賀宮) 遙拝 退出

勅使以下、祭主・大宮司・少宮司以下諸員、荒祭宮(多賀宮)を遙拝の上斎館に退下、遷御の儀が全て終了致します。

臨時出仕に奉仕して

東角井 真 臣

第六十二回の式年遷宮に際し、神社庁より御推戴を賜り、外宮にて臨時出仕として遷宮祭を奉仕致しました。

遷御の儀前日、修養団にて参籠に入り、先ず、河原大祓にて祓い清めを行いました。外宮内の中御池畔にて仮御樋代・仮御船代・御装束神宝を納めた辛櫃二十四合と共に、齋主以下、奉仕神職全員が揃い修祓。その後、臨時出仕が唐櫃を担ぎ、御正宮の所定の位置に据えました。私は、西相殿御料の納められた辛櫃を担ぎ、御正殿大床下に昇据える所役

難な程です。

当日は、正午より、祭儀中の心得及び作法の説明を受けた後、辨備、習礼をし、白雑色、赤単・平礼烏帽子・白括り袴・白靴を着装、夕刻より奉仕位置につきました。奉仕は、新宮の瑞垣内の庭燎で、新しい御正殿のすぐ傍にて、土器の中に杉の葉と薪を入れ、忌火で

療を焚きます。

十八時、夕闇迫る神域に号鼓が響き渡りました。新宮での奉仕の為、最初の二時間は、御正宮での祭儀は音しか聞こえません。神儀を待つ新宮は、大きく荘厳に闇の中に浮かび立ち、その金具は、燎の炎でゆらゆらと揺れ輝きます。薪の燃える音、御白石の軋む音、鳥の声、風の音、正に浄閑静寂の

中、ただ二時間、じっと蹲踞の姿勢で薪をくべます。顔がじりじりと熱くなり、顔を上に反らすと、霧雨に気が付きました。火照った顔が雨に冷やされ、心地良かったのを思い出されます。

神宝授与の召立ての音が聞こえ、「カケロー」と鶏鳴三声が闇夜に響き渡ると、一気に緊張感が走ります。

二十時丁度、神儀は、御御正殿より絹垣の内に出御あらせられ、松明の中、敷布の上を新殿にお渡りになります。絹垣が通る時に燎を消し、入御せられると同時に、また燎を灯けます。全くの闇の中、真白の絹垣に囲まれた御が、ゆつくりと進み、新宮に入御されるのは、すぐ間近でしたが、距離以上に遠く、神秘幽玄の出来事に思え、時間が止まり、息をも止まる思いで、ただ、深々と頭を下げました。

その後、御神宝が、召立てにより御正殿に奉納、御扉を閉じ、勅使が御祭文を奏上し、中重にて八度拝の後、退下となりました。

二十一年に一度の御遷宮に奉仕致し、感慨深く神職冥利に尽きるの一言であります。御皇室と神宮を頂く日本人として、この有難さや身に染みて感じ、改めて、式年遷宮が滞りなく齋行された事の素晴らしさに、感謝致します。二十一年後に向けて、遷宮の心を広く伝え、これからも、今まで以上に、神宮をお守りお支えすると、決意新たに致しました。

(武蔵一宮氷川神社権宮司)



外宮 遷御の儀



外宮 川原大祓

提供 神社新報社

平成二十五年度教化研修会報告

新井能成

平成二十五年度教化研修会を九月九日・十日に三峯神社を会場に、五十三名の参加の下、開催致しました。

今期の教化委員会のテーマである『氏神・産土信仰と家庭祭祀の教化』に基づき、今年度の教化研修部の目標を「社会福祉への貢献」とさせて頂きました。

そこで、今回の研修会を開催するに当たり、東日本大震災より二年半が経過し、神社関係者が行うことができる社会貢献とは何かを模索しながら、今回の主題を『神社が取り組む

社会貢献』と掲げ、「神社と、地域社会を支える住民の力との関係について」を課題とした研修を企画致しました。

また、「生きる喜び」を考察し、今後、本県でも予想される災害の備えとして、神社関係者が、地域の人々のために如何に意識を持って行動すべきなのか、講義や模擬体験などを交えた研修を提案致しました。

当日は、黒崎浩行國學院大學神道文化学部准教授により「神社の絆と、その現代的可能性」と、荒木真幸月山神社禰宜（岩手県陸前高田市気仙町鎮座）により「神社が避難所になったら〜東日本大震災を経験して〜」と題して講演頂きました。

先ず、黒崎先生には、宗教とソーシャルキャピタル（社会関係資本）との関係をご講演頂きました。

ソーシャルキャピタルとは、人々の協調行動が活発化することにより、社会の効率性を高めることができるという考え方のもとで、社会の信頼関係・規範・ネットワークといった、社会組織の重要性を説く概念で、人間関係資本、



社交資本、市民社会資本とも訳されます。

中でも、絆（例えると、縁（社会的ネットワーク）・裏切らない（信頼関係）・おかげさま（互酬性の規範））となり、この三つが豊かなところ

は、人々の調和も取れているとお話を伺いました。この心を大切にしながら、神社の役割として地域社会を持続させ、世代間継承を果たし、自治体・市民との連携を目標に、教化活動を行う事が大切なのではないと思いました。

次に、荒木先生には、被災時の体験談をご講演頂きました。想定外の沢山の避難者が境内に押し寄せたお話は、身に迫る思いでした。緊急時の判断を即座に、如何に下すかも難しい問題だと思いました。ただ、神社境内では「統制は取れなかったが、境内の秩序は保てた」というお話には、日本人の根底にある産土神に対する思いを感じました。

結びに、先生がお話をされた言葉に、「東北でなく、臨海の大都市で起きたら・東京で起きたら、日本滅亡のような大災害ではなかったか、ある意味、東北で良かったのかもしれない」「貴重な体験ができ、神に感謝することを忘れない」という言葉には、私ども神職の立場を超えて、感銘を受けました。

両先生の講演後は、班別討議の時間を設け、

静岡県NPO法人作成により、「避難所HUG」という、震災仮想体験ゲームを行いました。

避難所HUGとは、避難所のH・運営のU・ゲームのGの頭文字をとり、HUG（抱きしめる意味も兼ねています）と称しています。

今回、参加者を五つの班に分け、先ずゲームの進め方を説明し、次に、班員全員が簡単な自己紹介を行います。これは、アイスブレイキングという手法で、初対面のグループの緊張をほぐすためには欠かせないものです。

内容は、もし、自分自身が、避難所の運営をしなければならぬ立場になったとき、最初の段階で殺到する人々や出来事に、どう対応すれば良いか。避難所運営を皆で考えるためのひとつのアプローチとして、作成された物で、避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれ



が抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか。また、避難所で起こる様々な出来事に、どう対応していくかを模擬体験するゲームです。

参加者は、このゲームを通して災害時要援護者への配慮をしながら部屋割りを考え、また、炊き出し場やトイレの配置などの生活空間の確保、視察や取材対応といった出来事に對して思いのままに意見を出し合ったり、話し合ったりしながらゲーム感覚で避難所の運営を学ぶことが出来ます。

約九十分内に色々な状況の人達や出来事が書かれた二百五十枚のカードの内容を、如何に、迅速に判断し、尚且つ、無理無く配置するかというゲームに、参加者一同、時間を忘れて、没頭しました。

唯一残念だったのが、今回用いたものは、静岡県危機管理部が作成したものであるために、避難会場設定が学校の体育館だった事でした。荒木先生の御講演を頂いた事で、神職という立場で、もし、神社が避難所になったならば、宮司として如何なる判断をするべきかを体験出来れば、境内地としての特殊な判断

や、尚一層、実践的な意見が参加者から頂いたのではと思いました。

翌日は、前日のゲーム結果を、班ごとの避難所の運営・判断・対応について、「私達の班では〇〇は××だったので△△しました」の様な形式で、班別に判断結果を発表して頂き、他班との差異に對して、もう一度自分達の考えを問い直す討論をして頂きました。発表五分・討論十五分の持ち時間で行いましたが、最初の内は少なかつた意見も、後半には活発な意見が出るようになり、有意義な研修が出来たと思えました。

二日間に亘り、神社が取り進む社会貢献がテーマに行いましたが、ある意味、「備災」の色が強く出てしまった内容でした。普段では想像すらしめない事態を皆で問い合う事により、有事の際に少しでも役立てればと思えました。

結びに、今期、初回の研修という事で、班編成から研修日までの時間も少なく、多少企画に無理があつたのではなかつたかとも思いましたが、参加者皆様には、快く研修を修了されました。来年の開催に向け、様々な企画を練り上げ、多くの方に御参加頂けるよう、班員一同、準備を進めて行きたいと思えます。
(教化研修部班長)

(本研修の目的や参考資料、講演の抄録並びに、詳しい研修の内容につきましては、社社庁ホームページ内のサイト内検索で、「教化研修会」と入力してご覧下さい。)

初任神職研修

大宮 宏和

平成二十五年 総代研修会

高橋 寛司

初任神職研修が、八月八日から十日にかけて、長瀬町の寶登山神社(中山高明宮司)で、同月二十七日には東松山市の箭弓稲荷神社(澤田昌生宮司)を会場に、計四日間開催された。本年は十七名が受講した。

寶登山神社では、主に座学を中心に神職に必要な知識を学んだ。初日は、「神社本庁史」「神社実務」の研修と、「神道行法(鎮魂)」を行った。二日目は、早朝より荒川にて禊を行い、午前午後にかけて、「神職奉務心得」「神宮に関する講義」を研修した。その後、受講生が中心となって夕拝を執り行った。最

終日は、朝拝から始まり、「祝詞」「神社実務」午後より祭式の指導を受け、寶登山神社での研修を終えた。

箭弓稲荷神社では、祭式の基本作法の確認から始まり、その後二班に分かれて行事を行った。受講生は自身の動作を講師に指導され、動きを再確認し、真剣に取り組んでいた。箭弓稲荷神社では初任神職研修と併せて祭式研修会も開催されており、研修会受講生と新任神職との交流が生まれていた。本年も、受講生全員が無事に研修を修了した。

4	3	2	1	日数
8/27 (火)	8/10 (土)	8/9 (金)	8/8 (木)	月/日 (曜) 時
箭弓稲荷神社	寶登山神社	寶登山神社	寶登山神社	5:00
	起床・洗面	起床・洗面		6:00
	朝 拝	朝 拝 神道行法 (持田・朝日)		7:00
	朝 食	朝 食		8:00
受 付			受 付	9:00
正式参拝・開講式	祝 詞 (中山主任講師)	神職奉務心得 (岡本)	正式参拝 開 講 式	10:00
祭 式 (作 法)	神社実務 (前原)	神職奉務心得 (大澤)	本 庁 史 (山田)	11:00
昼 食	昼 食	昼 食	昼 食	12:00
	祭 式 (高梨・千鳥直 竹本・高麗)	神職奉務心得 (山中)	本 庁 史 (新井)	1:00
祭 式 (行 事)		神宮に関する 講 義 (馬場)	本 庁 史 (新井)	2:00
	閉 講 式	神宮に関する 講 義 (高橋)	神社実務 (武田)	3:00
閉 講 式		夕 食	夕 食	4:00
		神職奉務心得	神社実務 (武田)	5:00
		夕 拝	神道行法 夕 拝 (持田・朝日)	6:00
		入浴・就寝	入浴・就寝	7:00
				8:00
				9:00



(庁報編集委員)

八月二十一日、北葛飾支部当番により、久喜市の三高サロンにおいて、平成二十五年 総代研修会が開催され、各支部より総勢百十二名の総代・神職が参加しました。

開会式では、大野光政神社氏子総代連合会長、中山高嶺庁長から挨拶がありました。

研修は、「遷宮のつぼ」と題して、伊豆野誠(株)扶桑社『皇室』編集部編集長が講演されました。

伊豆野氏は、本年二月に、これまで季刊誌『皇室』や『フクハウチ伊勢』の記事として取材・執筆されてきたものに加筆・再編集し、神社本庁監修による「神社検定公式テキスト」である『遷宮のつぼ』として刊行されました。

そこで、間近に迫る御遷宮について、平成十七年からの取材に基づく体験を交えながら、解りやすく遷宮までの道のりについて解説していただきました。

遷宮についてはお白石持行事の最中で、参加者の中には、既に特別神領民としてお白石奉獻を終えた方もあり、参加者は、間近に迫った遷御までの解説に関心を傾けていました。

平成二十五年埼玉県神社庁神職総会

土屋 一彦

平成二十五年埼玉県神社庁神職総会は、北足立支部が当番となり、九月二十四日、さいたま市大宮区の「清水園」を会場に開催されました。

来賓として大野光政埼玉県神社氏子総代連合会会長を始め、各郡市総代会長をお迎えし、二百三名の参加を得ました。

開会式に先立ち、この一年間に帰幽された神職の方々に併せて、去る八月三日に逝去された井上久前埼玉県神社氏子総代連合会会長に黙祷が捧げられました。

開会の辞、神宮遙拝、国歌斉唱、敬神生活の綱領唱和に続き、中山高嶺庁長より、今期の基本方針となる「支部再編」「新庁舎建設」等が述べられました。次に、来賓を代表して、大野光政総代会長より、「ご挨拶を戴きました。



総会では、鈴木邦房北足立支部長が座長を務め、始めに新任・転入神職の紹介が行われ、代表として宮川基水川神社権禰宜が登壇し、中山庁長より記念品が手渡されました。

引き続き、前原利雄参事より神社庁業務報告、高麗文康教化委員長からは、新体制となった今期の活動テーマ・組織・各部・各班の取り組みが説明されました。この後、嶋田久仁彦神道青年会長、竹本多恵子神道婦人会長、小柴清教育関係神職協議会長から、これまで行った事業の紹介と今後の活動について発表が行われました。

休憩を挟み、研修として、中摩徹彌元海上自衛隊海将・学校法人二松學舎理事をお招きし、「危機のリーダー」と題して講演を戴きました。

先生は、神戸の海上自衛隊阪神基地隊指令在任中、阪神淡路大震災に遭遇され、現場指揮官として携われた救援活動等の体験を交え、「情報は伝わらない」「マニュアルは役に立たない」とされ、自らの行動方針の絵を頭に描き、何から始めるか、優先順位の決定が重要とされました。また、自分は何の為に存在しているのか、使命・目的は何か、それを自覚して、誇りをもって向かっていく強い心を表す「何の用ぞ」という帝国海軍からの伝統的な教えがあると、ご講演戴きました。

懇親会では、鈴木支部長の挨拶に続き、橋本昭司北足立総代会長の乾杯の発声により開会となりました。懇談の途中では、新任神職の自己紹介が行われ、竹本佳徳副庁長の中締めによりお開きとなりました。

(北足立支部事務局長)

雅楽普及研修会

大宮 宏和

本年九月五日に雅楽普及研修会が、武蔵一宮氷川神社(東角井晴臣宮司)呉竹荘を会場に開催され、二十四名が受講した。当日は生憎の雨であったが、受付を済ませた受講生は参進して本殿へ向かい、正式参拝を行い、その後、呉竹荘に戻り、開講式を執り行った。当研修会では、神職以外の方も受講した。また、雅楽初心者も多数受講しており、その様な方にも、講師が丁寧に一から指導に当たった。

日程としては、始めに笙・篳篥・竜笛と管ごとに分かれて、練習を行った。

昼食を挟んで、午後には三管が集まり、合奏を行い、各自が練習した成果を発揮した。(庁報編集委員)

【訃報】井上久前埼玉県神社氏子総代会長逝去
去る八月三日、井上久前埼玉県神社氏子総代連合会会長が呼吸不全のため逝去されました。享年八十九歳。

平成二年四月より秩父郡市神社氏子総代会長並びに埼玉県神社氏子総代連合会評議員、同四年四月から埼玉県神社氏子総代連合会副会長並びに神道政治連盟埼玉県本部副本部長、同十一年八月から神宮崇敬会理事、同十六年四月に埼玉県神社氏子総代連合会会長並びに神社本庁評議員に就任され、以来、九年に亘りお務めいただき、本年三月三十一日をもって御勇退されたばかりで、突然の訃報となりました。

井上氏におかれましては、会長就任以来、神宮大麻増頒布や総代研修会の開始等、氏子総代の意識向上のため積極的にお尽くし頂いたご功績をお称えするとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

神道入門講座およびバスツアー開催

高橋 信 和

神道入門講座

去る八月三十日、さいたま新都心駅近くのクラブツーリズムカフェにおいて、「神道入門講座」と題して講演会を開催した。

講座の参加者は、旅行代理店クラブツーリズム(株)を通じて申し込まれた方々約三十名で、講師は教化委員会事業部長の東角井真臣武蔵一宮氷川神社権宮司と武田淳神社庁主事補が務め、それぞれ約一時間の講演を行った。

東角井権宮司は「氷川神社の歴史と年中祭事」と「武蔵国の神社の特徴」について、武田主事補は「神道入門講座」と題して神社本庁や神社庁、参拝作法や神道について講演された。参加された方々は熱心に耳を傾けていた。

バスツアー
去る九月二十一日、バスツアー「神主さんと神社へ行こう！秩父三社巡りと三峯神社で「昼食」を開催した。

このツアーは、神社庁並びに教化委員会事業部を主体として開催され、埼玉県内の神社を訪れて、参加者に神社や神道を体感・体験していただき、神社ファンをつくることを目的にしている。

今回は、今までの経験を活かして旅行代理

店クラブツーリズム(株)と共同企画で進められ、案内係の「神主さん」として、武田主事補と私が同行した。

当日、午前七時にさいたま新都心駅に集合して、バス一台にて目的地である三峯神社へ向った。車中では、遷宮のビデオ鑑賞と、武田主事補による神社本庁や神社庁、神道に関する話のほか、手水や参拝作法、神職についての説明をされ、参加者からの質問等に受け答えをして到着までの時間を有効に活用した。

三峯神社に到着すると、手水を受けて拝殿に進み、正式参拝を行った。この時、参加者の代表の方に玉串拝礼を体験していただいた。

その後、奉仕の神職から、三峯神社に関する解説を受けた。別室に移動し、参加者に祓詞の浄書体験をしてもらった。約三十分間、奉書に向き合い、慣れない筆に悪戦苦闘しながら書き上げられた祓詞は、参加の記念品にさせていただいた。その後、昼食を済ませて、三峯神社をあとにした。

次いで、秩父神社に到着すると、蘭田建権宮司より境内を巡りながら、神社の御由緒や解説があった。参加者は、

社殿前に進み、左甚五郎作と伝えられる彫刻などを見学した。

最後に、寶登山神社では、正式参拝を行なった。この時も参加者の代表の方に玉串拝礼を体験していただいた。拝殿内では中山高明宮司より御由緒など説明があった。

帰りの車中で、参加者にアンケートに記入していただき、無事、さいたま新都心駅に到着した。

今回、一日で秩父三社を巡るという厳しい日程であったが、一般的な旅行ツアーにはないことを体験できるこのツアーは、参加者には大変好評だったようである。

(教化委員会事業部長東角井班員)



神道入門講座



三峯神社 浄書



三峯神社 浄書



三峯神社 昼食



秩父神社



寶登山神社 中山宮司挨拶

庁務日誌抄

8・15	8・9	8・7 8・9	8・8 8・10	8・5	8・1	7・30	7・24	7・23 7・26	7・22 7・26	7・18	7・17	7・12	7・9 7・13	7・8 7・10	7・4 7・5	7・2
埼玉県護国神社みたま祭り	教化研修部会(新井班)	教化研修部会(新井班)	初任神職研修 十七名受講	社報編集会議	中山庁長他参列	武蔵一宮・水川神社例祭	新庁舎建設検討委員会	祭祀指導者養成研修会 藤沼・原(泰)・岩田・橋本受講	一都七県中堅神職研修会第十八次(甲) 塩谷・大澤・宮本受講	教化事業部会(藤沼班) 教化事業部会(東角井班)	支部再編検討委員会	埼玉連主催「平和の祈り」 神道青年会奉仕	教化事業部会(原班)	青少年対策研修会 宮崎(博)受講於 山梨「キープ協会」 第百八回中堅神職研修(丁) 須長・鈴木(智)受講	祭祀指導者養成研修会 十六名受講	庁報編集会議
於 神社本庁	於 神社本庁	於 神社本庁	於 寶登山神社	於 寶登山神社	於 水川神社	於 神社本庁	於 神宮道場	於 明治神宮會館	於 大宮・水川神社	於 大宮・水川神社	於 カトリック川越教会 於 大宮・水川神社	於 大宮・水川神社	於 伊勢「神宮道場」	於 箭弓稲荷神社	於 神社本庁	
			任													
茂木 君夫 兼 小鹿神社禰宜	滝島 幸弘 新 氷川神社權禰宜	白石良由夏 新 氷川神社權禰宜	土師 守 本 廣野大神社他七社宮司	大島 克彦 新 八坂神社禰宜	茂木 啓司 新 伊弉諾神社禰宜	教化研修部会(神島班)	新庁舎建設検討委員会	神職総会 二百三名出席	教化事業部会(藤沼班) 武田主事補受講	全国神社総代会大会 中山・大野・前原・武田・大宮他出席	教化事業部会(原班)	神宮大麻頒布始祭他諸会議 中山庁長・前原参事出席	別表神社宮司懇話会 前原参事出席	教化事業部会	祭祀研修会 四十七名受講	
(秩父)	(入間)	(入間)	(秩父)	(秩父)	(大里)	於 大宮・水川神社	於 大宮・水川神社	於 大宮「清水園」	於 神社本庁	於 三峯神社	於 大宮・水川神社	於 大宮・水川神社	於 長瀨町「長生館」	於 箭弓稲荷神社	於 久喜「三高サロン」	

9・1 榎田 優 新 水川神社權禰宜 (比企)
 9・15 石田 雅之 本 水川神社他八社宮司 (比企)
 相馬 文彦 兼 末野神社宮司任命 (大里)

本務替
 9・30 引間 傳二 新 白鬚神社宮司 (秩父)
 葛城神社宮司 (秩父)

転任
 8・17 篠田 孟宜 本 赤城久伊豆神社禰宜 (大里)
 鷲宮神社權禰宜より転任

免
 7・31 引間 尚美 本 白鬚神社禰宜退職 (秩父)

帰幽
 嶋田 精一本 水川神社宮司 (北足立)
 (七月二十五日 享年六十五歳)
 吉田 一雄 本 末野神社宮司 (大里)
 (八月二日 享年九十歳)
 宮壽 邦夫 本 八幡大神社宮司 (児玉)
 (八月七日 享年六十六歳)

新年互礼会開催のお知らせ
 期日 平成二十六年一月十七日(金・仏滅)
 会場 大宮・清水園
 水川神社正式参拝 午後一時より
 新年互礼会 午後二時より

神社実務研修会開催のお知らせ
 期日 平成二十六年二月中を予定
 (決定次第ご連絡致します)
 会場 川越・水川神社「水川會館」
 主題 「氏子をその氣にさせるためには」
 申し込みは、支部事務局まで

式年遷宮の諸祭(平成25年)遷御まで

御白石持行事 内宮7月26日～8月12日、外宮8月17日～9月1日の金・土・日・月

完成した正殿が建つ御敷地に敷く白石を奉献する行事です。御木曳行事と同様、地元の旧神領民が揃いの法被姿で浜参宮の後、内宮は川曳きと陸曳き、外宮は陸曳きでお白石を運び、御敷地に奉献します。旧神領民に全国の一日神領民も加え、今回は、延べ約23万人が参加しました。

御戸祭 内宮9月13日午前10時、外宮9月15日午前10時

新殿に御扉を取り付ける祭儀で、御扉が付くことは殿外造作の完了を意味します。建物の神の屋船大神をまつり、御扉に御鑰穴を穿ちます。造宮庁主催の最後となる祭儀です。

御船代奉納式 内宮9月17日午前10時、外宮9月19日午前10時

大御神ならびに相殿神の御神体をお納めする「御船代」を新殿内に奉納します。

洗清 内宮9月24日午前10時、外宮9月26日午前10時

新殿竣功にあたり、禰宜が御正殿内の御樋代・御船代・御玉奈井・御床と殿内を洗い清めます。権禰宜は殿外や大床、御階などを洗い清めます。奉仕員は東西の宝殿、外宮の御饌殿を洗い清めます。

心御柱奉建 内宮9月25日午後8時、外宮9月27日午後8時

心御柱は、正殿の御床下に建てられる特別な御柱で、忌柱・天ノ御柱・天ノ御量柱とも呼ばれます。心御柱の奉建は遷宮諸祭の中でも、ひときわ重んじられてきた深夜の秘儀です。

杵築祭 内宮9月28日午前10時、外宮9月29日午前10時

新殿竣功に際し、御敷地である大宮地を祭員が八角形の檜製の白杖で突き固める祭儀で、祭員が新殿の御床下の御柱根の周りを三度巡り、御柱の根本を古歌を唱えながら突き固めます。

後鎮祭 内宮10月1日午前8時、外宮10月4日午前8時

新殿の竣功に際し、御敷地の大宮地の平安を祈ります。着工の「鎮地祭」に対する返しの鎮めの祭りです。

御装束神読合 内宮10月1日午前10時、外宮10月4日午前10時

新たに調達された御装束神宝の目目を、新宮の四丈殿において読み合わせる遷宮祭の最初の儀式です。

川原大祓 内宮10月1日午後4時、外宮10月4日午後4時

仮御樋代・仮御船代をはじめ、御装束神宝や遷御に奉仕する神宮祭主以下の奉仕員を祓い清めます。

御飾 内宮10月2日正午、外宮10月5日正午

御正殿と東西の宝殿、外宮の御饌殿と外幣殿の内部を調達された御装束で装飾し、大床を神宝の威儀物で飾ります。

写真提供 神宮司庁/神社新報社



内宮 御白石持行事



内宮荒祭宮 御戸祭



外宮 御船代奉納式



内宮 杵築祭



内宮 後鎮祭



内宮 御装束神宝読合